

# お篠姉妹

野村胡堂

—

話はガラッ八の八五郎から始まります。

「あら親分」

「——」

「八五郎親分」

素晴らしい次高音メツオ・ソプラノを浴びせられて、八五郎は悠揚ゆうようとして足を止めました。意

気な単衣ひとえを七三に端折ふところって、懐中の十手は少しばかり突っ張りますが、夕風に

胸毛むなげを吹かせた男前は、我ながら路地のドブ板を、橋がかりに見たてたい位の

ものです。

「俺かい」

振り返るとパツと咲いたような美女が一人、嫣然えんぜんとして八五郎の鼻を迎えま  
した。

「八五郎親分は、江戸にたった一人じゃありませんか」

「お前は誰だい」

「ずいぶんねエ」

女はちよいと打つ真似をしました。見てくれは二十二三ですが、もう少しヒ  
ネているかもわかりません。自棄やけな櫛くし巻まきにした多い毛にも、わざと白粉おしろいを嫌きらつ  
た真珠色の素顔にも、野暮を売物にした木綿ひとえの单衣ひとえにも、つつみ切れない魅力みりよく  
が、夕映ゆうばえといっしょに街中にひろがるような女でした。

「見たような顔だが、どうも思い出せねえ。名乗って見な」

「まア、大層なせりふねえ、——遠からん者は音にも聞け、と言いたいけれど、

実はそんな大袈裟おおげさなんじゃありませんよ、——両国の篠しのをお忘れになって、八五郎親分」

女は少しばかりしなを作つて見せます。

「何だ、水茶屋のお篠か。白粉おしろいツ気が無くなるから、お見それ申すじゃないか」

「まア、私、そんなに厚塗あつぬりだったかしら？」

お篠はそんな事を言いながら、自分の頬へちよつと触つて見せたりするので、笑うと八重齒が少し見えて、滅法可愛らしくなるくせに、真面目な顔をすると、屹きつとした凄味が抜身のように人に迫るたちの女でした。

「赤前垂あかまえだれを取払うと、すっかり女が変るな。一年近く見えないが、身でも固めたのかい」

「飛んでもない、私なんかを拾つてくれ手があるものですか」

「そうじゃあるめえ、事と次第じゃ、俺も拾い手になりてえ位のものだ」

「まア、親分」

お篠の手がまた大きく夕空に弧を描くのです。

「ところで何か用事があるのかい」

「大ありよ、親分」

「押かけ女房の口なら御免だが、他の事なら大概相談に乗ってやるよ。ことに金のことなどと来た日にや——」

「生憎あいにくねえ。親分、金は小判というものをうんと持っているけれど、亭主になり手がなくて困っているところなの」

「ふざけちゃいけねえ」

「ね、八五郎親分。掛合かけあいはまた来年の春にでもゆっくり伺うとして、本当に

真剣に聴いて下さらない？」

「大層あらたままた改りやがったな」

「私本当に困ったことがあるのよ、八五郎親分」

「あんまり困ったような顔じゃないぜ、何がどうしたんだ」

ガラッ八も引き込まれるともなく、少しばかり真面目になりました。

「親分は私の妹を御存じねエ」

「知ってるとも、お秋とか言ったね。お前よりは二つ三つ若くて、お前よりも

綺麗だった——」

「まア、御挨拶ねエ」

「その妹がどうしたんだ」

「両国の水茶屋を仕舞しまった時の借りがあつたので、私と別々に奉公したんです。

私は——今は止したけれど浅草の料理屋へ、妹は堅気がいいと言うんで、湯島の山名屋五左衛門様へ——」

「そいつは料簡が悪かったな、山名屋五左衛門は、かいわい界限に知らぬ者のない癖くせの

悪い男だ」

「それも後で聞きました。驚いて妹を取戻しに行きましたが、どうしても返しちゃくれません」

「給料の前借でもあるのか」

「そんなものはありやしません」

「証文を入れるとか、受人をたてるとか、何か形の残るものが向うへ入って居るんじゃないか」

「知った同士で話をつけ、何一つ向うへは入って居ません」

「それじゃ戻せないことはあるまい」

ガラツ八は一向手軽なことのようによく考えて居るのでした。

「女一人行ったところで、馬鹿にされて戻されるのが精々です。今までにもう、三度も追い帰されました」

「フーム」

「今つれて帰らなきや、妹のお秋にどんな間違があるかも判りません。独り者の山名屋はお秋を妾めかけにする気で居るんです。あの娘には、まだ祝言こそしな  
いが、決った許婚いいなすけがあるのも承知の上で」

「そいつは気の毒だが、本人が帰る気が無きやどうすることも出来ない」

「本人は帰りたいに決っています。あんな蝸たこにゆうどう入道が瘡おこりを患わずらったような、五十男  
の手掛てがけになって、日蔭者で一生を送りたい筈はありません」

「――」

「この間も私が行くと、逢わないながらも、二階の格子の中で泣いて居るじゃありませんか。私はもう可哀相で可哀相で」

「それで、俺に何をしろと言うんだ」

ガラッ八も大分呑込みがよくなりました。

「決して無理なことをお願いするんじゃないやありません。山名屋の店先へ行つて、見えるように見えないように、その懐中ふとこの十手をチラチラさして下さりやいいんです。私が一人で乗込んで、主人を始め番頭手代と掛合い、きつと妹のお秋を救い出して来ます」

お篠は一生懸命説きたてるのです。一時両国の水茶屋で、鉄火者てっかもので鳴らしたお篠が、妹のお秋を虎狼ころうの脛あぎとから救い出したさに、ガラツ八の十手のチラチラまで借りようと言うのは、全く並々ならぬ危険を感じたからのことでしょう。お秋あきのろうたき美しさをガラツ八は知り過ぎて居るだけに、この頼みを蹴飛ばしかねました。

「よし、それじゃ行ってやろう」

「有難うございます、八五郎親分」

「その代り、俺は店の中へは入らないよ。外に居て、十手をチラチラさせるだ



けだよ」

ガラツ八は馬鹿馬鹿しくも念を押します。

## 二

ガラツ八とお篠しのが、湯島の山名屋へ行ったのはその晩の戌刻いっつ過ぎでした。途中で一パイ引つ掛けて、いい機嫌になったガラツ八は、その晩の冒険に対して、何かこう、芝居染みた興味をさえ感じていたのです。

遅い商売の酒屋の店も、大戸おろを卸おろそうというとき、

「ちよいと待ちな、主人に用事があるんだ。俺じゃねえ、あの女だがネ——」  
敷居際に立ちはだかった八五郎は、片手弥造を懐へ落して、時々十手をチラチラリと見せるのでした。

「へエー」

相手が悪いと思ったか、手代の一人はあわてて奥へ飛込みましたが、やがて戻って来ると、

「主人は離屋はなれに居ります、どうぞ木戸から庭へ廻って下さい」

木戸をあけて丁寧に案内するのです。

「お篠、行つて来るがいい。俺はここで待っている」

「――」

お篠はそれに感謝の眼で応こたえて、手代と二人、木戸の中の闇にスーツと消え  
ました。

それから一刻ばかり。

煙草たばこをのんだり欠伸あくびをしたり、鼻を掘ったり、ガラツ八がいい加減退屈した

頃、

「待たせたわねエ、八五郎親分」

庭木戸を開けて、そつとお篠が出て来ました。夜の闇を匂わせるような女ですが、この時は不思議にしんみりして居りました。

「お前一人かえ」

「え」

二人は肩を並べるように、中坂を同朋町どうぼうちようの方へ降りたのですが、妙に話の継つぎ穂ほを失つて、しばらくは黙りこくつて居たのでした。

「本当に有難うよ、親分」

「そりゃ構わねえが、肝心かんじんのお秋はどうしたんだ」

「駄目よ、やはり。証文を出さなくたって、奉公人に変りはないんだもの。出代り時でもないのに、無理につれて来るわけに行かない」

「そんな馬鹿なことはないだろう」

「可哀相に、本人もその気になって」

お篠の謎なぞのような言葉は、ガラッ八の神経にも何やら大きい疑問符ぎもんぷを投げかけました。

「山名屋に踏み止まる気になったのか」

「え」

二人はそれっ切り、また黙りこくってしまいました。

朧おぼろの月。秋近いのに、春めく生温かさが、良い年増と歩くガラッ八を、少しばかり道行めかしい心持にします。



「八五郎親分、ここでお別れしましょう」

お篠はフト立止りました。

「お前はどこへ行くんだ」

「近頃は三味線堀にいますよ、奉公は止して、母親といっしょに」

「それじゃ気を付けて行きねエ、一人で淋しくはないのか」

「江戸の真ん中ですもの」

「江戸の真ん中だからな」

「ホ、ホ」

お篠は面白そうに笑うのです。男が淋しがらないものを、女が淋しがっていいものですか——と言った気でしよう。

「あばよ、お篠」

「あ、ちよいと、八五郎親分」

「何だい」

「怒っちゃ嫌よ、親分、——これはほんの私のお礼心、取って下さるわねエ」

お篠は八五郎に寄り添うように、紙に包んだものを、そつとその袂たもとに落し込むのです。

「何をするんだ」

あわてて取出すと、紙が破れて、落ち散る小判が三枚——五枚。

「あれ、八五郎親分」

「冗談じゃねエ」

八五郎は手に残る小判を汚きたないもののように叩き付けると、佛然ふっぜんとして背そびらを見せました。

「まア、親分」

お篠はこの世の奇蹟を見るような心持で、立ちつくしました。長いあいだ水

茶屋に奉公して、張も意気地も心得たつもりのお篠ですが、安岡っ引が袖の下を取らないなんということは、想像して見たこともなかったのです。

### 三

山名屋五左衛門はその晩殺されたのです。

離屋はなれの一と間で、誰とも知れぬ者の手で、胸を一とえぐり、声も立てずに死んだのでしよう。縁側に崩折くずおれたまま、血汐の中に息が絶えておりました。

何時、どうして殺されたか、母屋おもやにいる奉公人たちは何にも知りません。翌る朝になって、手代の清松が庭から声を掛けると、雨戸は一枚だけ開け放ったまま、カンカンと朝陽の入る中に、五十男の主人五左衛門は脂あぶらぎった死体を横たえていたと言うのです。



騒ぎは一瞬しゅんのうちに、山名屋を煮えくり返らせました。

銭形平次が飛んで行ったのはそれから一刻の後。一通り現場を調べると、雨戸は確かに主人山名屋五左衛門が開けたもの、寝巻ねまきの浴衣ゆかたを着たまま、人を迎えたか送ったか、ともかく、縁側に立ってうっかり月か何か眺めたところを、沓脱くつぬぎにいる曲者が、下から脇差で、一と思いに左乳の下を突き上げたものです。

中を調べると、番頭の元吉の言い分では、離屋の金箱に入れておいた五百両の小判が、綺麗になくなっております。五左衛門を突いた脇差は、その辺に見当らず、奉公人達には別に怪しい者もありません。

番頭の元吉は五十前後、三十年も奉公した白鼠しろねずみで、しつかり溜めたてはいる様子ですが、溜める事に興味を持ち過ぎて、盗ることなどは考えていそうもありません。こんな肌合の人間は、百両盗むよりも、五十両胡麻ごま化かす方に情熱を感じてでしょう。手代の清松は若くて少しばかり道楽者な上、死骸の発見者で、

着物に血まで附いておりますが、これは死骸を見付けたとき、あわてて抱き起したせいだと言っております。

他に、下女が二人、下男が一人、小僧が二人、これは疑いの外におかれます。

下女二人と、小僧と下男が二つの部屋に寝ているので、夜中に便所に起きても人に知られずには済みません。

もう一人、くらかけくらんど鞍掛蔵人という恐ろしくいか厳めしい名を持った浪人者が居候をして

おります。四十年輩ねんはいの遠縁のお国者で、名前のむずかしいに似ぬ、猫の子のよ  
うな二本差でした。五左衛門は用心棒のつもりでおいた様子ですが、小僧から  
下女にまで甘く見られて、劍術よりはこうたじょうるり小唄浄瑠璃の節廻しに苦勞する肌合の男  
です。

もう一人、お篠の妹のお秋は、行く行く五左衛門の身の廻りの世話をする筈  
でしたが、まだ目見得中で、おもや母屋に泊っており、これは十九のぐびじんそう虞美人草のよう

な娘でした。ほそおもて細面で、小麦色の皮膚と、茶色の眼を持ち、逢っていると、あまり口をきかなくせに、相手を陶酔みちびに導かずには措かないと言った、世にも得難い魅力の発散者です。

死骸の発見者で、血の附いた着物を着ている手代清松は、いちばん先に疑いの矢面やおもてに立ったことは言うまでもありません。

「主人の死骸を見付けたのは何刻だ」

「卯刻半過ぎむつはんでございました、——その頃になると、いつも起きて来る主人が、今朝に限って起き出さないのです、変だと思つて行つて見ると——」

「銭形の、その手代の野郎の荷物の中に、小判で三百両隠してあつたぜ」

真砂町まさごちようの喜三郎——若くて野心的で、平次の心酔者なる御用聞が、風呂敷に包んだまま、三百両の小判を持って来て見せたのです。

「そんな事もあるだろうよ。血だらけな足で、離屋はなれの中を歩いたのは、どうも

この野郎らしいと思った」

平次はそう言つて、清松の肩に手を置きました。

「あ、それは、それは」

「それは何うした。一季半季きはんきの奉公人が、三百両の大金を溜めたなんて言つたつて、お白洲しらすじゃ通用しねえよ。太てえ野郎だ」

「親分さん、——その金は盗つたに違いありません。が、主人を殺したのは私じゃありません。主人の死骸を見付けたとき、部屋の隅に金箱ふたの蓋があいて、中のお金が見えていたんです。ツイ、私は——」

「金は盗つたが、主人を殺した覚おぼえは無ないと言うのか」

「その通りです、親分」

と清松。

「銭形の、そんな甘口な弁解を信用しちやならねえ、——第一金箱には五百両

入っていた筈だつて言うぜ、あとの二百両をどこへやったんだ」

喜三郎は少し焦れ<sup>じ</sup>気味に清松を小突き廻します。

「それは、八五郎親分に訊いて下さい」

清松は変な事を言い出しました。

「——？」

「昨夜八五郎親分が、お秋の姉のお篠といっしょに来て、離屋<sup>はなれ</sup>で主人と一刻あまりも話をして帰りました。——それっきり、家中の者は誰も主人に逢いませ  
ん」

「それは本当か」

平次は四方を見廻しました。が、番頭の顔にも、小僧の顔にも、清松の言葉  
に対する否定<sup>ひてい</sup>の色は少しもありません。

「やい、八」

「へエ——」

平次のこんなに腹を立てた顔を、八五郎はまだ見たこともありません。

「<sup>てめえ</sup>手前に言わせると、一と通りの理窟はあるようだが、そんなところへ立ち廻らねえのが岡っ引のたしなみと言うものだ。万一人殺しの片棒などを担<sup>かつ</sup>がせられたら何うするつもりだ」

「へエ——」

「妹を救い出すとか何とか言つて、大金を持出したに違げえねえ。すぐ飛んで行つて、お篠に泥を吐かせるなり、次第によつては、引<sup>ひ</sup>つ括<sup>く</sup>つて来やがれ。着物へ血でも附いていたら、弁<sup>い</sup>解<sup>わ</sup>させるんじゃねえぞ」

「そんなものは附いちゃいませんでしたよ、親分」

「白地の浴衣ゆかたでも着ていなきや、少しくらい血が飛沫しぶいたって、夜目に判るものか、馬鹿野郎」

「へエ——」

八五郎はまことに散々の体です。

「山名屋には主人を殺すようなのは一人もいねえ。流しの押込みうらみでなきや怨のある人間の仕業しわざだ。主人が雨戸を開けてやったところを見ると、流しの押込みでないことも判り切っている。あの五左衛門は女癖は悪いが、金放れがいいから、思いの外町内ほかでは評判のいい男だ。お篠でなきや、お篠に掛り合いの人間の仕業に違えねえ。すぐ行って来い」

平次の調子は火のように猛烈です。

「へエ——」

「万一手前の名前なんか出ると、十手捕縄の返上くらいじゃ済まねえぞ」

「へエ——」

八五郎は全く追っ立てられるように飛んで出ました。こんなに脅かされたこととはありません。

三味線堀へ行って捜すと、お篠の隠れ家はすぐ判りました。路地の奥の奥の、置き忘れたようなささやかな長屋。

「お篠はいるかい」

八五郎が精いっぱい太い声をかけると、

「まア、八五郎親分」

妙に物なつかしそうな声といっしょに、嫣然としたお篠の笑顔が現われます。

「来い、太てえ女だ」

八五郎は飛付いて、お篠の手頸をギユウと掴みました。



「あッ、何をするのさ、きさ気障だね」

お篠はカツとなつて、きお勢い立つた雌猫めねこのように逆毛さかげを立てました。

「ふざけるなお篠、——ゆうべ持つて来た金、ありや何処から出した」

「何処から出そうと勝手じゃありませんか」

「山名屋の主人を殺したのが、お前でないという証拠は一つも無いぞ」

「えッ」

「脇差をどこへ捨てた」

「何を言うんだい、——私はそんな事を知るものか。金は妹を奉公させる代りに、二百両受取つたに違いないが、私が別れる時はピンピンしていたあの五左衛門が——」

お篠の言葉は半分述懐になつて、何やら深々と考え込んでしまいました。

「言い訳はお白洲しらすでするがいい、さア、来い、——俺までだしに使いやがつて

太てえ女だ<sup>あま</sup>」

ガラツ八はなおもお篠の手をグイグイと引きます。

「そんなつもりじゃありませんよ。私が二百両の金を取って来たわけ、みんな言つてしまひましょう、八五郎親分」

お篠はガラリと調子を変えると、崩折<sup>くずお</sup>れるようにそこに坐つてしまひました。

幸い母親は観音様のお詣りで留守、誰に遠慮もなく、お篠はつづけるのです。

山名屋五左衛門は庶腹<sup>しよぶく</sup>の弟で家を継ぎましたが、五左衛門の兄に当る先代五左衛門の子の宗兵衛というのが、五十を越して伴宗次郎といっしよに、金沢町に細々と暮しておりました。これは当然山名屋を継ぐべき筈でしたが、放埒<sup>ほうらち</sup>で眼を潰した上、父親の生前勘当されていたことを言い立てて、叔父の五左衛門に追い出され、叔父の五左衛門自身が山名屋の後に坐り込んで、五左衛門の通り名を名乗ったのは、もう二十年も前のことです。

眼の不自由な宗兵衛は、二十四になる俵の宗次郎といっしよに、骨に沁<sup>し</sup>みるような貧苦と闘い抜きましたが、近頃はその戦闘力もうせ、餓死<sup>がし</sup>を待つばかりの果敢<sup>はか</sup>ない身の上に落ち込んでいました。

お篠お秋姉妹は、父親の代から受けた恩に酬<sup>むく</sup>いるため、水茶屋奉公をしながら長いあいだ宗兵衛親子に貢<sup>みつ</sup>ぎました。しかし、近頃は世の不景気と共にそれさえ不<sup>ふ</sup>如意<sup>にょい</sup>になり、とうとう五左衛門の望むまま、お秋を奉公に出して、少しばかり纏<sup>まと</sup>まった金を貰い、それで、せめても宗次郎が身の立つようにしてやるつもりでしたが、強<sup>した</sup>か者の五左衛門は、美しいお秋を手元に留めおきながら、あのこうのと言ひ延ばして、容易のことでは、纏<sup>まと</sup>まった金などくれそうもなかったのです。

「ゆうべはいよいよ妹を返すか、三百か五百の纏<sup>まと</sup>った金を出すか、命がけで掛け合うつもりで、山名屋へ行きました。でも、私のようなものが一人で行った

ところで、真面目に相手にしてくれる五左衛門ではありません。途中で親分に逢ったのを幸い、親分の俠氣きょうきに縋すがって、一緒に行ってもらいました。親分が門口で十手を見せて下されば、奥へ入らなくても、山名屋のような悪い事ばかりしている人間は、ギョツとするに違いないと思いついたのです」

「――」  
八五郎は唸うなりました。かなり太い話ですが、そう聞けば、ムキになって怒るわけにも行きません。

「山名屋は離屋はなれの縁側でたしかに私に二百両の金を渡しました。たった二百両ばかりの金で、妹を人身御供ごくうに上げるかと思うと、私は涙が出て仕様がなかったけれど、それもこれも宗次郎さんの身を立てるためと思つて、眼をつぶつて帰つて来ました」

「でも、二百両でも取れたのは、みんな親分のお蔭です。そう思ってお礼を上げたけれど——」

「それから何うした」

ガラツ八は押っ冠せて訊きました。

「金沢町へ持って行って、宗次郎さんに渡しました」

「宗次郎は黙って受取ったのか」

「——その代り妹のことは諦めてくれ——あきらって、くれぐれも言ってやりました  
が」

「すると二人は？」

「え、二人は一緒になる筈だったんです」

お篠は淋しそうでした。

## 五

八五郎はしよんぼり帰って来ました。

「こんなわけだ、親分。お篠は脇差わきざしなんか持つちやいなかつたし、どんなに太い女だって、岡っ引を番人にして人を殺すわけはねエ。五左衛門から金を貰ったというだけじゃ、縛れないじゃありませんか」

そう言うのが、せめてもの弁解いひわけです。

「なるほど、それじゃお篠は縛れまい。もういちど山名屋へ行つて見ようか」  
平次は恐れ入るガラツ八をつれて、もういちど湯島へ行つて見ました。

「銭形の、大変なものが手に入ったぜ」

真砂町の喜三郎は、泥だらけの脇差を振り廻して、すっかり悦えつに入っております。

「何処にそんなものがあつたんだ」

と平次。

「一町ばかり先の下水に突っ込んで、血だらけな柄つかだけ水の上に出ているのを、子供が見付けて大騒ぎしていたんだ」

「柄だけ出ていたんだね？」

「柄が隠れるほど打ち込んでいちゃ、見付からなかつたかも知れない」

「どれどれ」

受取つて見ると、なるほど手頃な脇差で、溝泥どぶどろで滅茶滅茶になっておりますが、鰐つばからは大して汚れず、紺糸こんいとを巻いた柄には、ベツトリ血がこびり附いております。

「この脇差の持主がないから不思議さ、それに鞆たばもない」

喜三郎はまだその辺を掻き廻しながら、こう言うのです。

平次は、一応家の者に当りましたが、何の得るところもありません。浪人者くらかけくらんどの鞍掛藏人に言わせると、この脇差は犬威いぬおどしのようなもので、町人のたしなみに持ったものだろうと言うこと、武士の魂とは、少し縁の遠い代物しろものです。

「金沢町へ行って見よう、ここは喜三郎兄哥に頼んで。来い、八」  
「へエ」

「その脇差を借りて行くぜ、真砂町の」

「あ、いいとも」

平次は油紙を一枚貰って、泥と血まみに塗れたのをクルクルと捲まくと、金沢町へ飛びました。何が何やら解らずについて行く八五郎。

山名屋の隠居の宗兵衛の家は、平次もよく心得ております。

「御免よ」

犬小屋よりもひどい裏長屋。



「あ、錢形の親分さん」

盲目の主人——宗兵衛と膝つき合せて、<sup>せがれ</sup>伴の宗次郎とお篠は何やら話しておりました。

「この脇差はお前のだろうね」

平次は油紙の包をクルクルとほぐすと、少し乱暴に、泥と血に塗れた脇差を宗次郎の膝の前に<sup>ほう</sup>抛り出します。

「私のですよ、親分」

宗次郎は悪びれた色もありません。

「<sup>さや</sup>鞘はどうしたんだ」

と、平次。——後ろからは八五郎の眼が<sup>こ</sup>虎視眈眈<sup>たんたん</sup>としております。

「面喰らって脇差だけ置いて来たんでしよう、<sup>は</sup>鞘はここにありますがよ」

宗次郎は静かに<sup>た</sup>起って、形ばかりの戸棚から、<sup>ろうぬり</sup>蠟塗の<sup>は</sup>禿げた鞘を持って来て、

平次の前に押しやりました。

二十四というにしては、若く弱々しく見えますが、知識的な立派な若者で、貧しさを超越ちようえつした、品のよさがあります。

「この脇差で、山名屋の五左衛門が殺されたんだ。言い訳を聞こうか」  
平次は上がりかまち框に腰を掛けて正面からピタリと三人を見やりました。

「みんな言つてしまひましょう、聴いて下さい——」  
宗次郎は改まった調子で始めました。

「——」

「ゆうべ亥刻半過ぎにお篠さんが、二百両の金を持って来て、お秋の身の代金こころみせしにこれだけ受取つて来たから、これで私に身を立てろと言うんです。——その志は有難いが、お秋を人身御供ごこうに上げて、私は出世する気はありません。一応金を受取つた後で、お篠さんが帰るとすぐ、その二百両を持って湯島の山名

屋へ行き、案内知った木戸を開けて、いきなり離屋はなれの戸を叩きました」

「宗次郎の話の意外さ。お篠も全く思いがけなかったらしく、眼を見張って聞  
入るばかりです。」

「五左衛門に二百両の金を返して、お秋をすぐにも返してくれと強談しました。  
私は泣いたり、怨うらんだり、脅おどかしたり、とうとう持って行った脇わきざし差まで抜いて、  
畳に突き立てて責せめました。最初は五左衛門も鼻であしらっていましたが、私  
の劍幕があんまり凄かったものか、とうとう承知をして、三日のうちにきつと  
お秋を返すということまで誓言しました」

「それつきりか」

「それつきりです、親分。私はあまりの嬉しさに、畳へ突っ立てた、抜身の脇  
差さやを鞘さやに納めるのも忘れ、そのまま此処まで飛んで帰ったのです。帰って来て

から、腰に脇差の鞘だけ残っていることに気が付いた位ですもの、五左衛門を殺す道理がありません」

そう言う宗次郎の顔には、純情家らしい一生懸命さがあつて、駈引も嘘もあろうとは思われません。

「それは何刻なんどきだった」

「帰こつたのは子刻ここのつ少し過ぎでした。心配しながら子刻の鐘を聴いていると、まもなく伴せがれが帰かつて来て、——ああ清せい々せいした、金は五左衛門に返かしましたよ——と言いつて、そのまま床へもぐり込んだ様子でした」

父親の宗兵衛が口を容いれるのです。

「親分——金箱から無なくなつたのは五百両、三百両は今朝清松がくすねたとすると、昨夜のうちに二百両なくなつたのは確たかだ。死たんだ者は証人にならねえ。もう少しここを捜して見ようじゃありませんか」

八五郎はそつと後ろから平次の袖を引きます。

「黙って居ろ」

平次はその袖を払って何やら考え込んでおります。

## 六

「親分」

「何だ、お篠」

平次はお篠の思い詰めた顔を見詰めました。

「私を縛って下さい」

「何？」

「五左衛門を殺したのは、この私です」

「何だと、お篠」

「宗次郎さんの後をつけて行って、様子を残らず聴いてしまいました。——宗次郎さんがそんなに妹の事を思ってくれるのに、私はまア、何という情けないことをしてしまつたんでしよう。五左衛門はあんな器用なことを云つたつて、それは思い詰めた宗次郎さんが怖いから、当座のがれに言つたまでの事で、本当の心持は、お秋を返す気はないに決っています」

「——」

「私は、宗次郎さんが帰つた後で、あの脇差を取つて、一と思いに五左衛門を殺しました。それに違いはありません。私を縛つて下さい、銭形の親分」

お篠はそう言つて、自分の両手を後ろに廻し、平次の方へ膝行り寄るのです。

白粉気のない顔は青ざめ、まぶた 瞼に溢れる涙が、あふ 豊かな頬を濡らして襟に落ちるの  
でした。

「幾いくた太刀斬ちった」

と平次。

「滅茶滅茶に斬りました」

「それから、二百両の金はどうした」

「腹が立つから、溝どぼに抛ほうり込みました」

「よしよし」

「宗次郎さん、私は縛られて行きます。処刑おしおきに上がったら、線香の一本も上げて下さい、——そして、お秋と仲よく暮して下さい」

「何を言うんだ、お篠さん、お前は人を殺せるような人じゃない」

宗次郎は驚いて立ちかかりましたが、お篠の一生懸命さに圧倒されてどうすることも出来ません。

「もういいよ、お篠。お前は宗次郎を下げしゅ手人にんと思ひ込んで、そんな事を言うの

だろう。が、宗次郎が下手人でないことは脇差をおいて来たのでも、鞘を隠さなかつたことでも解っている。お前が下手人でないことは——八五郎の顔を見ろ、あの通りニヤニヤ笑っているぜ。八の野郎は飛んだお篠さん鼻<sup>び</sup>肩<sup>い</sup>さ。第一、五左衛門は沓<sup>くつぬぎ</sup>脱<sup>だ</sup>から一と突きにされて死んでいるんだ、女の手で滅<sup>め</sup>茶<sup>ちや</sup>滅<sup>め</sup>茶<sup>ちや</sup>に斬られて死んだわけじゃない」

「——」

お篠はへたへたと崩折れました。

「八、もういちどやり直しだ。こんな他<sup>た</sup>愛<sup>わい</sup>もない殺しで、こんなに骨を折るのは珍らしい。下手人になり手が多過ぎたよ」

平次はそんな事を言いながら、金沢町を引揚げてしまったのです。

それから湯島へ引返す道々、

「八、二百両の金をどこへ隠したと思う？」



平次は変なことを訊きます。

「自分の行李こうりか何かじゃありませんか」

「いや、山名屋の奉公人の荷物はみんな見たが、そんなものを持っていたのは、清松だけだ」

「へエ」

「下手人は昨夜ゆうべの子刻過ぎここのつ、宗次郎が帰った後へ行つて、宗次郎の脇差で一と思いにやった後、二百両の金をどこかに隠し、脇差を溝どにさし込み、わざと見つかるとように柄つかだけ出して置いた、——あの脇差の血だらけな柄が見えるように溝の中に突つ立っていたと聞いた時から、俺は下手人は脇差の持主ではあるまいと思つたよ」

「へエ——」

「山名屋から一町も持出したところを見ると、下手人は十中八九山名屋うちの家の

者だ」

「清松じゃありませんか」

「いや、清松は下手人じゃない。下手人なら三百両の金を盗って、自分の行李などへ隠す筈はない」

「すると？」

「下手人は二百両の金を飛んでもないところへ隠しておいたに違いない、——どうしても知れないところで——後できっと自分の手に入るところだ——後できっと自分のものになるところ、——溝や下水じゃ誰が見付けるかも分らない」

「——」

「下手人は恐ろしく食えない奴だ。每晚主人の様子を覗<sup>うかが</sup>って、殺す折<sup>ねら</sup>を狙<sup>ねら</sup>っていたかも知れない。あの離<sup>はなれ</sup>屋から誰の寝部屋へ一番よく道が付いているか見物<sup>みもの</sup>だ。庭は苔<sup>こけ</sup>が一ぱいだが、五六遍も歩くと跡が付く」

「主人の五左衛門が死んで一番損をする奴は誰だ——いちばん儲もうかるのは、五左衛門には子がないから、山名屋の跡を継つぐ宗次郎だろうが、その宗次郎に疑いをかけるように仕向けたのは、ちよつと見たところ、五左衛門が死んでいちばん損をするような人間に違いない」

「——」  
次第に疑問を畳み上げて、下手人の影法師に生命を付与ふよして行く親分の強大な想像力イマジネーションに、ガラツ八は呆気にとられて聴入るばかりでした。

## 七

「親分、庭の苔こけは、母屋おもやの居候先生の部屋の窓の下まですつかり踏ふまれています

すよ」

八五郎は鬼の首でも取った様子です。

「よしよし、それから、主人が死んでいちばん損する奴は誰だか聞いて来い」

「へエ——」

八五郎がもういちど母屋へ行くうち、平次は離屋の戸棚からいろいろの書類を取出してザツと眼を通しました。

「有金は千三百四十八両、貸金が三千五百両、外に地所と家作——大變な身上しんしょうだな」

平次は番頭の元吉を相手に遺のこされた身上を調べております。

土蔵へ案内させて、有金を調べて見ると、帳面通り千三百四十八両、ピタリと合つて、一文の狂いもありません。

「番頭さん、さすがに恐れ入ったね。主人が死んだ後で、一文一銭の不審な金

もないと言うのは大したことだ」

「へエ、恐れ入ります」

「ところで、その紙に包んである分は何だい」

「これは奉公人達へわけてやるように、主人が達者なうちから、こうして置きました」

「どれどれ」

「跡取りのない御主人のことで、無理もない用意でございます」

手に取って見ると、紙に包んで小僧二人の分は十両ずつ、下女と下男へ五両ずつ、手代へ五十両、居候の鞍掛蔵人くらかけくらんどへ二百両。

「お前さんのはないようだね」

「へエ、残りを私が頂戴することになっております」

「大層なことだね」

「それから貸金の方は、山名屋の後を継ぐ方に引渡します」

「なるほど、——ところで、この包の上に書いた字は、主人の筆跡かい」

「左様でございます」

「それにしちや墨色が新しいようだが——」

「——」

平次が指先に力を入れて、包んだ紙を揉み砕くと、

「あッ」

中から出て来たのは、斑々と鮮血に染んだ、小判が二百枚。

「親分」

「あわてるな八、下手人はあの浪人者じゃねえ。こんな手数のかかった細工をした黒鼠だ」

平次が差した指は、真っ直ぐに元吉の血の気を失った額を指したのです。

「御用ッ」

飛付く八五郎、全く一とたまりもありません。

×

×

「あの番頭が悪者とは驚いたね」

ガラッ八は絵解きが聞きたそうな顔です。下手人の元吉を送った帰り途。

「跡取りの無い山名屋だもの、主人が死ねば、番頭の一存で身上しんしやうはどうにでもなるものさ。さいしょ俺は浪人者をあやしいと睨んだが、だんだん調べて行くうちに違って来た——」

「お篠や宗次郎は？」

「あの二人は善人だよ、はなから、疑って見る気もしなかった。尤ももつと、お篠は宗次郎に気があった。妹を人身御供に上げてまでも、宗次郎に出世させようとしたのは悪かったが、宗次郎がすぐ金を突っ返して来たと聞いて、自分の悪かつ

た事に気が付いたのさ。それに、脇差わきざしは宗次郎のだと聞いて、てつきり下手人を宗次郎と思い込み、妹と宗次郎への申訳に、自分で罪を背負しよって行く気になつたんだらう、——考えはあさはかだが、あんな女は憎くないね」

平次はこんな事を言つて、一度はお篠の道具に使われたガラツ八の顔のそを覗くのです。

「番頭を下手人と解つたのは？」

「宗次郎が帰つたあとで主人に会い、疑われもせず易々やすやすと殺せるのは、元吉か蔵人くらんどか清松の外にない。清松はそれほど深い企みたくらのある男でなし、蔵人は二本差のくせに、猫の子のような男だ、それに」

「それに？」

「帳尻を合せて大金を胡麻化ごまかすのは、番頭の外にない。が、有金千三百四十八両と書いてあるのに、清松の盗んだ三百両を勘定することをうっかり忘れてい



たところなどは、落着いて居るようでも矢張あわてて居たんだねやっぱり

「なるほどね」

「宗次郎の持つて来た二百両の金を、どこかへ隠したに相違ない。どこへ隠したかいろいろ考えたが、——金の隠す場所は、金箱がいちばんいいと気が付いた。これなら人に見付けられることも、疑われることもない」

「なアーる」

「だが、どんなに細工が上手でも、血の中からかき集めた二百枚の小判を、洗っている暇はなかった筈だ。封をして一々名前を書いたのは、考え抜いたことは違いないが、それがまた臭いことだった。遺言ゆいごんをして金をわけるなら、一枚書いたものがあれば沢山だ、一々包んで置くのはどうかしている」

平次の説明には、もう一点の疑問もありません。

「浪人者の窓の下に道をつけたのは」

「つまらない細工だよ、小器用な悪人はそんな事で人が騙せると思っているだけのことさ」

「それでみんな解りましたよ、親分。ところで、宗次郎や、お篠姉妹はどうなるでしょう？」

「宗次郎は山名屋の跡取になるだろうよ、お秋はその女房さ」

「お篠が可哀相じゃありませんか、親分」

「悪くない女さ、——八の女房などにどうだい」

「御免蒙ろう、強請の片棒を担がせられちゃ敵わない」

「そう言うな、八。俺はあのお篠という女に見どころがあると思うよ」

二人はそんな事を言いながら、——もう平次の家へ近く差掛っております。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「錢形平次捕物百話」第九卷 中央公論社 昭和十四年八月五日発行

底本—「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

お篠姉妹



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>